

第 23 回世界災害救急医学会 WADEM2025 Tokyo を企画、登壇しました

(2025/5/2-6)

テーマ：Governance in the Face of VUCA: The Power of Knowledge, Courage, and Solidarity in Health System (VUCA 時代のガバナンス：保健医療システムにおける知識・勇気・連帯の力)
会場：京王プラザホテル、東京都

2025 年 5 月 2 日（金）～6 日（火）にわたって開催された世界災害救急医学会 (WADEM) 2025 Tokyo において 災害医学研究部門の江川新一教授（災害医療国際協力学分野）はプログラム委員長、座長、演者として登壇しました。当初は 2021 年に企画されていたものですが、新型コロナウイルス感染症パンデミックのために 4 年間延期され、ようやく開催に至りました。5 月 3 日（土）の開会式では、日本学術会議との共催により、愛子内親王が臨席されました。愛子さまは、災害医療と救急医学の発展に尽力される方々に敬意を表され、災害現場での判断の難しさ、そして、高齢者や障害者、外国人妊産婦など、特に支援を必要とする方々への支援体制の構築の重要性を強調されました。また、全ての人々の尊厳が守られ、適切な医療や保健サービスを受けられる体制の構築が非常に重要であると述べられました。最後に、会議が災害医療及び救急医学の進展、並びに国際協力の深化に寄与する実り多きものとなることを祈念され、開会式に寄せる言葉とされました。

WADEM2025 Tokyo には 82 か国から 1300 名の参加があり、うち 1000 名が海外からの参加であり、これまでの本学会出席者数の過去最多を更新しました。5 月 2 日にはプレコンgresワークショップが開催され、WHO とアルバータ大学が共催した災害・健康危機管理研究における Research Design Canvas Workshop では、研究を立案する際に役立つ構造的な考え方を学ぶことができました。この研究は誰に聴かせるためのものなのか、社会にとってどのような役に立つのか、すでに知られていることと知られていないことのギャップは何か、などを改めて問い直す必要があります。

江川教授は、プログラム委員長として演題や招待演者の選定に関わり、初日と最終日のプレナリーパネルディスカッションで座長をつとめました。初日は、わが国が発展させてきた災害医療体制を、いかに世界の災害医学関係者、あるいは保健医療以外の災害科学の研究者・実践者と共有するかに主眼をおいたディスカッションとなりました。また最終日は、貧困や武力紛争、社会的不安定性といったまさに VUCA の中で、脆弱な立場におかれている被災者の身体的・精神的・社会経済的なウェルビーイングをいかに取り戻すか、そこで保健医療のはたすべき役割は何かについてのディスカッションとなりました。

また江川教授は、WHO が主催する Risk Informed Governance のシンポジウムに演者として登壇し、わが国の災害医療体制の深化と同時に病院の業務継続計画（BCP）が着実に進められていることも紹介しました。また、わが国では災害関連死として統計がとられている災害による間接的な死亡について、国際的な理解と認知を推進することの重要性を説明しました。

わが国においても世界においても、災害・健康危機は多様化、複雑化し、オールハザードアプローチに基づく総合的な防災と災害対応が求められています。保健医療セクターだけでも他の防災セクターだけでも解決できるものではなく、社会とともに防災と災害対応を進めていかななくてはなりません。

WADEM は、学術交流はもちろんのこと、災害という共通課題を通して世界中の研究者・実務者・政策立案者などが一堂に会してネットワークを強化する絶好のチャンスです。第 24 回はパリで開催されます。



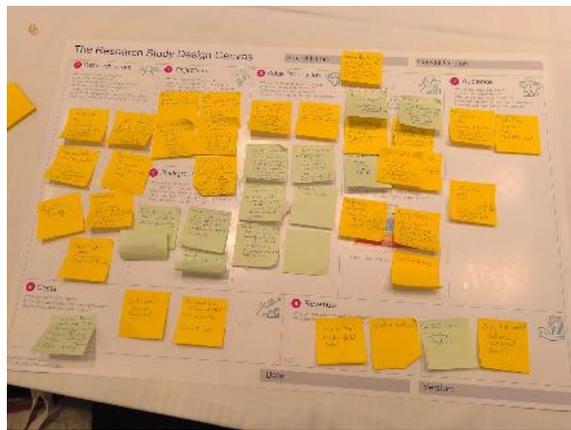
最終日のプレナリーセッション
パネリストとともに



WHO Research Design Canvas
Workshop の参加者



演者と聴衆が入れ替わるテーブルトップ
プレゼンテーション



研究立案に役立つ研究デザインキャンバス
プレゼンテーション